



指導するアニタ・クスコフスカと  
(左から) N. フェルナンデス、  
E. ノヴァク、A. ピエティラ

Photos: E. Kauldhar/Dance Europe

## 6月号の主な記事:『ラ・バヤデー』影の王国のヴァリエーション

今月号の日本語ページでは、Focus On Three Variationsの要約版をお届けします。ワルシャワでのポーランド国立バレエのリハーサル取材しました。

バヤデーとは、寺院の舞姫の意味。異国情緒と超自然の世界を融合させた魅惑的な作品で、「影の王国」を筆頭に、マリウス・プティパの最高の振付が含まれています。西側で最初の演出は、1980年のアメリカン・バレエ・シアターによるナタリヤ・マカロワ版で、現在ではポーランド国立バレエを含む多くのバレエ団により上演されています。

今回の3つのヴァリエーションが踊られるのは、その「影の王国」の場面。ニキヤの死を嘆き、アヘンにひとときの慰めを求めたソロルの夢の中に、影(死者の魂)たちの一人として愛しいニキヤが現れます。永遠に続くかのようにアラバスク・アロンジュを繰り返しながら影たちが登場してくる場面は、バレエのイメージそのものであり、コール・ド・バレエにとって最大の見せ場でもあります。

指導者は、アニタ・クスコフスカ。ワルシャワの国立バレエ学校を卒業し、1989年にポーランド国立バレエに入団。自身も何度となくこの場面を踊り、現在は指導者となりました。彼女と、各ヴァリエーションを踊った3人のダンサーにお話をうかがいました。

ダンス・ヨーロッパ(DE):それぞれのヴァリエーションの特徴は?

クスコフスカ(AK):曲の順序は変わる場合もありますが、第1のものは明らめで、才気を感じさせる踊り。第2はもっと誇り高く、威厳のある身体使いが必要。第3はたいへん静かで、神経系を完璧にコントロールするにはいけません。もっとも抒情的ですが、最後に意外性に満ちた加速が待っているのもこの踊りです。教えていても、とても楽しいですね。それぞれの踊りを完成させるにはたいへんな手間がかかりますが、それだけ満足感も大きいです。それに導入部のワルツも、楽そうに見えてじつは体力的にきつい踊りなんです。だからこそ、ここ各ソロ、コーダとすべて仕上がったときの喜びは、何ものにも代えがたいです。

DE:ポワントで走る部分もあり、強いポワント・ワークが必須ですね?

AK:そのとおりです。でもじつは一番の難物は、アラバスク・ルルヴェで歩幅を稼ぐことだと思います。うちの舞台は大きいので、その分大きく動かなくてはならないんです。

DE:この第1のソロは人気があり、みんなが踊りたがりますよね?

ナタリー・フェルナンデス(NF):ええ、スピードと抒情性の両方が揃っていて、私も大好きな踊りです。

DE:ルルベ・アラバスクで大きく移動するのは難しい?

NF:速い移動のステップは好きなので、そうでもないです。アラバスクに集中すれば、ルルヴェ・アチチュード・ドゥヴァンへのフィニッシュもうまくいきますし。ルルヴェするときにポワントへの上がりをきちんと意識すれば、アラバスクのバランスも自然に取れるんです。この最後のパートは大好きですが、逆に難しかったのは中間部でピルエット・デヴロッパからソー・ド・シャに移るところ。指揮者との相性によっては、タイミングを正確に掴むのがたいへんなんです。それから、フットワークに気を取られると、ポール・ド・ブラがおろそかになりがちになります。腕と脚を、別々に意識しなくてはいけないんですね。

DE:このソロで難しかったのは、どこですか?

アグニエスカ・ピエティラ(AP):最初のカプリオールです。勢いに変化をつけるよう言われましたが、速さも変わるし、とても難しかったです。

DE:でも、全身の見せ方やポール・ド・ブラはすごく伸びやかできれいでしたよ。

AP:ありがとうございます。早く、自分でもそう実感できるようになりたいです。

DE:じつにハードなソロですが、どこが一番難しかったですか?

エヴァ・ノヴァク(EN):ほとんど全部です。脚と足が美しいダンサーなら楽にラインを出せるのですが、私は残念ながらそうじゃないので、ステップ一つひとつの見せ方がたいへんです。

DE:上手く踊れたときの満足感も高い?

EN:まだ上手く踊れたためしがありません(笑)特に本番では照明が入るし、お客様もいらっしゃるし。でも一番心配なのは、実際に始まるまでテンポが分からないこと。このヴァリエーションはほとんど同じ脚で踊るんですが、遅すぎるときちゃんと片脚に乗っていられて、コントロールができなくなるんです。だから一番好きなのは、最後の小走りのダイアゴナルですね。ここにきてやっと、「ああもう自由なんだわ!」って感じるんです。(翻訳:長野由紀)